

二〇一九年一月二一日

御降の雪へと変はる湖鏡
曙光さす日本海の初景色
雪かづく山巔に日矢射しにけり
人波に身を委ねたる初参り
餅花の揺れて賑はふ繁盛亭
このあたり御狩野あとや若菜摘む

二〇一九年一月一〇日

参道の店を梯子や初戎
実千両気づかぬ盗人鴉かな
狛犬の疵そのままに震災忌

二〇一九年一月九日

歳時記の 一頁より 読始
玉の日に蕩けさうなる臘梅花
本宮の千木に日の射す淑気かな
播磨灘綺羅を敷き延べ初風す
風花や友の訃報を疑ひぬ
新調のテニスシューズで初打す

二〇一九年一月八日

次々と万両増えて家古りぬ
乳母車福笹挿して戻りけり
寒昴妣のウインクかも知れず
初恵比須赤子が引きし大当たり

隆松

こすもす

明日香

たか子

菜々

菜々

菜々

ぼんこ

董雨

ぼんこ

もとこ

せいじ

たか子

うつき

よう子

ぼんこ

うつき

さつき

宏虎

さつき

さつき

二〇一九年一月七日

屠蘇の酔ひ大きな夢を語りけり
人日やあまたの敷布洗ひけり
いそいそと七草取りの夫と外へ
初湯殿たつぷりと湯を溢れしめ
ごみ出して普段着で述べ御慶かな

二〇一九年一月六日

無意識に両手は拳霜の朝
寒の水喉をするりと常備薬
悴む手息吹きかけて励ましぬ
朝厨先ず一杯の寒の水

二〇一九年一月五日

四日はや園丁苑にちらほら
襖絵の虎の眼光淑気満つ
元朝の水を静かに使ひけり

なつき

やよい

明日香

宏虎

やよい

三刀

満天

菜々

よう子

さつき

宏虎

うつき

毎日句会みのる選・二〇一九年一月一三日